

としま文化の日特別企画

『赤い鳥』を語り継ぎ、歌い継ぐ 童話・童謡の世界

豊島区は、2002（平成14）年の区制施行70周年以降、「文化によるまちづくり」に取り組んできました。この取り組みを次世代に継承していくため、2020（令和2）年、新たに「としま文化の日」が制定されました。特に11月1日～7日までは、豊島区の文化を集中的に広めていく期間となり、区内では様々な催しが行われます。2021（令和3）年11月6日に当館で行われた「としま文化の日特別企画『赤い鳥』を語り継ぎ、歌い継ぐ 童話・童謡の世界」は、その取り組みの1つです。

当館では、毎月第一土曜日に「『赤い鳥』を語り継ぐ、おばあちゃんのおはなし会」を開催し、『赤い鳥』から1作品、雑司が谷に住んでいた作家・小川未明の童話から1作品を、詩人の小森香子先生に朗読していただいています。今回は歌手の大庭照子先生をお招きし、童謡の魅力もお伝えしました。

小森先生は、芥川龍之介「蜘蛛の糸」（『赤い鳥』第1巻第1号初出）、小川未明「真心のとどいた話」を朗読され、大庭先生は西條八十作詞、成田為三作曲「かなりや」（『赤い鳥』第2巻第5号初出）を含む多数の曲を披露。大正時代に豊島区から発信された児童文化に朗読と歌で触れる、貴重な機会となりました。



▲小森香子先生



▲大庭照子先生



▲終演後の大庭先生と小森先生

（小山 勝美）

ギャラリートーク 今後の開催予定

2022年10月8日（土）、11月12日（土）、12月10日（土）

いずれも14:00より30分程度

※予約は不要です。開始時刻までに旧宣教師館の正面玄関前にお集まりください。

※諸般の事情により開催日時が変更または中止となる場合があります。

文化財の修繕とは？

—文化財をもっと身近に—



▲伊藤暢直学芸員（左端）と参加者の方々

「文化財」に対して、皆さんはどんなイメージをもっていますか。

「日常の会話では出て来ない」「あまり身近なものではない」と思う方もいらっしゃるかもしれません。一方で、「貴重なもの」「後世に残すべきだとされているもの」と考えている方も多いのではないかと思います。

日本には多種多様な文化財があり、保存の取り組みも、それぞれにあった形で行われています。当館では、東京都指定有形文化財（建造物）になった翌年の2000（平成12）年から、傷みやすい外壁の塗装作業を定期的に行っています。また、建物の内部についても、床や壁などに小破箇所が見つかった場合は修繕をしています。

この取り組みを周知したいと考え、2020（令和2）年度の大規模修繕の完了後に、保存と修繕に関するパンフレット「もっと身近に そして未来へ 豊島区立雑司が谷旧宣教師館の保存と修繕」を作成しました。あわせてパネル展示を行い、次いで見学会を開催しました。

上記のうち、今回の旧宣教師館だよりでは2021（令和3）年12月5日に開催された、大規模修繕に関する見学会の様子をご紹介します。講師を担当したのは、豊島区教育委員会の伊藤暢直学芸員。豊島区には30年以上務めており、区の歴史研究や文化財保護に長年携わってきました。今回の見学会は、その豊富な知識と経験を活かして講師をしていただきたいたいとお願いし、実現したものです。

（小山 勝美）



## 雑司が谷旧宣教師館の保存管理 —「2020年度大規模修繕」見学会—

雑司が谷旧宣教師館では、2021(令和3)年3月まで、およそ半年に及ぶ大がかりな修繕が行われました。同年12月5日、当館の保存にも長く携わる豊島区教育委員会文化財グループの伊藤暢直学芸員を講師に迎え、一般の方を対象とした見学会を開催しました。実際に修繕を行った箇所を中心に、これまでの保存の歴史や基本方針も含めて、旧宣教師館の修繕全般に関する内容となりました。以下に伊藤学芸員による解説の要旨をご紹介します。



▲熱心に解説に聞き入る参加者の方々

### 1. 保存の目的と基本方針

文化財建造物の修繕は、主として不具合が生じる前の備え(外壁の塗り直し、上げ下げ窓の紐の交換など)と、すでに生じている不具合への対処(床面の沈み込みなど)から構成されています。元の部材はできるだけ残すようにしますが、やむを得ず手を入れる場合も、最小限の範囲に留めるようにしなければなりません。こうした建造物は「古い」という理由だけではなく、背景にある歴史や地域にとっての存在意義などを合わせて、はじめて文化財としての価値が生まれます。この価値を後世へ伝えていくのが保存の第一の目的です。

### 2. 修繕の事例

#### 【外壁と窓枠の塗り直し】

豊島区が取得した時点では建造物全体が白で塗られていましたが、調査で窓枠が緑色であったことが判明し、白と緑の配色を復活させることにしました。

当初は油性ペイントが使われていましたが、時代とともに合成ペイントが主流となりました。2000(平成12)年度の修繕ではすでに緑色が廃番であったため、合成ペイントを使用しました。2020(令和2)年度の修繕では白色も入手ができず、合成ペイントに切り替えることになりました。合成ペイントは光沢が強すぎるため、つや消し剤を混ぜて油性ペイントの風合いに近づけるようにしました。今回の修繕に向けて、はくろ曝露試験(塗料を塗ったサンプル板材を屋外に設置し劣化状態を観察する試験)を行っています。

陽の光が当たる時間が長いので、南壁と西壁は塗装が最も傷みやすい箇所であるといえます。塗り直しを行う際は、まず古い塗装を削って剥がします。木材のへこみや損傷箇所はパテ(修理用の詰め物)で埋めておき、その上から新しい塗料を塗ります。一方、北壁は陽が当たらず湿気が多いので、木材にとってはあまり適した条件ではありません。そのため、部材を交換する頻度が最も高い箇所でもあります。

今回の修繕時には、板材が重なる部分の下辺に黒ずんだ汚れが見つかりました。壁面に付着した塵埃が雨で流され下辺に蓄積したものです。近年、周辺地域で開発工事が多かったことが影響しているようですが、花粉など他にも原因が考えられ、詳細は分かりません。以前とは環境条件が変化してきていることの現れでもあり、今後も注視していきたいと考えています。



▲湿気により損傷しやすい北側外壁

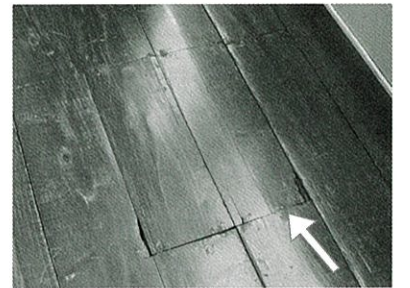
#### 油性ペイントと合成ペイント

油性ペイント(油性調合ペイント)は、植物油に顔料(色を付けるための材料)と添加剤を加えたもので、古くから塗料として使用されていました。ここでいう植物油とは亜麻仁油や紅花油などで、時間が経つと乾く性質を持ちます。なお、乾燥剤を加えて加熱した「ボイル油」を使うのが主流です。乾燥に時間がかかり、作業効率が良くないため、現在ではほとんど使われなくなっています。

合成ペイント(合成樹脂調合ペイント)は、植物油の代わりに合成樹脂を使用した塗料です。乾燥時間が短く、油性ペイントよりも塗りやすいとされています。つや消し剤を加える場合は、分量が多いほど耐候性(屋外環境での耐久性)が低下してしまうため注意が必要です。

#### 【床面の沈み込み】

床面の不具合は複数箇所で見つかりました。玄関のドア付近、2階の旧東側寝室(現在の企画展示室)の暖炉付近、旧浴室(情報検索コーナー)の入口付近です。いずれも床板を踏むと下に沈み込むようになっていました。床材を交換するという案も出ましたが、できるだけ元の床材を残すために工夫をしました。床面に最小限の作業用孔を開け、適切な楔や木杵を入れて下から床材を支えることにしました。床材の取扱いは、建造物の保存において最も基本的で重要な要素です。消耗品と見なし交換すべきという考え方と、元の床材を可能な限り残すべきだとする考え方がありますが、当館では後者を基本方針としています。



▲床面に残る作業用孔の跡

#### 【漆喰壁の亀裂】

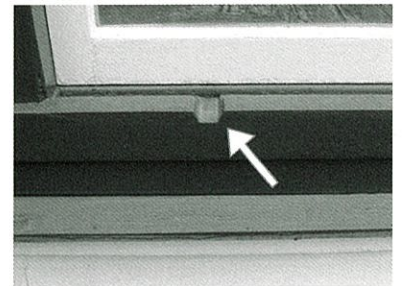
大きな亀裂が入っていたため、2010(平成22)年度に旧教会事務所(『赤い鳥』コーナー)の北壁を、2015(平成27)年度に旧居間の南壁を修繕しました。漆喰の下には木材が格子状に組まれた骨組みがあり、そこまで古い漆喰を剥がしてから改めて塗り直します。漆喰の色味を合わせるには部屋全体を塗り直すのが理想的ですが、不可能な場合は区切りの良い範囲(部屋の角から角までなど)全体を塗り直し、できるだけ違和感のないようにします。こうした亀裂の原因は明らかではありませんが、骨組みの一部である木摺(水平方向に張られた板)が地震や気候変動の影響を受けたためではないかと考えられています。



▲修繕が行われた旧教会事務所の北壁

#### 【引違い窓の溝】

引違い窓をはめ込む下枠(レール)を見ると、幅2~3cmほどの溝が付けられています。恐らく雨水を逃がすためのものと思われるのですが、この溝は屋内まで貫通しているため、逆に雨水や木の葉が中に吹き込んでしまう恐れもあります。建造物の保存とは、つまり雨との闘いでもあるため、この溝の存在のよし悪しについては判断が難しいのです。しかし、豊島区が取得した時点では既に付けられていたため、下枠の部材を新しく交換する場合であっても、この溝を復元して残すことにしています。



▲窓の下枠の各所に見られる溝

#### 【上げ下げ窓の紐】

上げ下げ窓は、日本の住宅ではあまりなじみがありませんが、綿の紐でつないだ重りによってバランスを保ち、窓が上下に開閉します。この紐は使用しているうちに徐々に摩耗していき、突然切れてしまうことがあります。このため、5年に一度の修繕時に順次、紐を交換します。このように、修繕には不具合のあるところを直すだけでなく、将来的な不具合を未然に防ぐメンテナンスとしての役割があります。



▲交換された新しい紐

### 3. 保存の課題と未来

近年は気候変動が激しい傾向にあり、大雨や大型の台風が増加しています。さらに、頻発する地震や開発工事によっても文化財に様々な影響が生じます。こうした要因は、これまでの経験からは予想できない損傷や被害をもたらす可能性があるため、注意深く観察を続けていく必要があります。かつて使われていた材料が生産されなくなるなど、必ずしも当初の条件を満たすことができるとは限りませんが、文化財を永く後世に伝えるため、持続可能な最善の方法を模索し続けていきたいと考えています。(嶋原 由美)